九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『資本論』の沙翁引用 : マルクスの演劇的筆法

福留, 久大
九州大学名誉教授

https://doi.org/10.15017/1813031

出版情報：經濟學研究. 84 (1), pp.93-108, 2017-06-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

『資本論』の沙翁引用

――マルクスの演劇的筆法――

福　留　久　大

(1) 沙翁＝シェイクスピア
(2) 沙翁愛好家・マルクス
(3) 英国のマルクス沙翁論
(4) 日本のマルクス沙翁論
(5) 沙翁学者のマルクス論
(6) クィド・プロ・クオゥ

沙翁＝シェイクスピア

沙翁とはウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）のことで、「沙吉比亜」や「沙士比阿」などから「沙」をとり敬称として「翁」を付けたものと考えられる。昭和初期までは割と普通に用いられていた。例えば、昭和９（1934）年中央公論社刊行の『ヘンリー四世第一部』（新修シェークスピヤ全集第七巻）の「緒言」で、訳者坪内逍遥（1859-1935）は、シェイクスピアを沙翁と表現している。「『ヘンリー四世第一部』の世に出でしは一五九八年の四折版を最初とすれども、其書下されしは一五九七年よりは晩からじと推定される。すなはち、劇作家としての沙翁の技が円熟の域に入りたる三十三歳頃の作なり」（１～２頁）。

現在は、チャールズ・ラム、メアリー・ラム作、安藤貞雄訳『シェイクスピア物語』（上）（下）平成20（2008）年第一刷として岩波文庫で刊行されている物語、*Tales from Shakespeare* by Charles Lamb（1775-1834）and Mary Lamb（1764-1847）は、かつては野上彌生子（1885-1985）訳『沙翁物語』と題されていた。その第一刷は昭和７（1932）年６月に発行され、筆者の大学入学の時、昭和35（1960）年の５月に刊行されたのには、第二十五刷と記されている。

沙翁愛好家・マルクス

マルクス（Karl Marx,1818-1883）がシェイクスピアを愛読し愛好していたことは、よく知られている。晩年の「告白」で「あなたの好きな詩人は？」という問いに「シェイクスピア、アイスキュロス、ゲーテ」と答えている（*Mohr und General: Erinnerungen an Marx und Engels*, Dietz Verlag, Berlin,1964, S.607.『モールと将軍（2)』栗原佑訳、大月書店、1976年刊、553頁)。

フランスの社会主義者で、マルクスの次女ローラ（Laura Marx, 1845-1911）の夫となるポール・ラ

ファルグ（Paul Lafargue,1842-1911）は、マルクスのシェイクスピアへの傾倒について、次のように書き残している。「彼は、談話のなかでしばしば引用するハイネやゲーテの作品を暗記していた。いつもあらゆるヨーロッパの文学のなかから選んだ詩人の作品を読んでいた。毎年アイスキュロスをギリシャ語の原典で読んでいた。アイスキュロスとシェイクスピアとを、人類の生んだもっとも偉大な劇作の両天才として尊敬した。無限の尊敬を捧げたシェイクスピアを、彼は徹底的な研究の対象にした。彼はシェイクスピアの劇中の最もつまらない端役でも知っていた。一家こぞってこの偉大なイギリスの劇作家を崇拝していた。彼の三人の娘たちはシェイクスピアを暗記していた。1848年の後に、それ以前にもすでに読むことのできた英語の力を完璧にしたいと考えたときには、シェイクスピアに固有な表現は全部探し出してこれを整理した」（A.a. o., S.323-324. 前掲書297～298頁）。

マルクスの末娘エリナ（Eleanor Marx, 1855-1898）も「モール（Mohr）」（マルクスのあだ名）との読書の思い出を記している。「モールは子供たちに読んで聞かせもしました。姉たちに読んで聞かせたように、私にも、ホメロス全部、『ニーベルンゲンの歌』、『グートルン』、『ドン・キホーテ』、『千一夜物語』を読んで呉れました。シェイクスピアはわが家の聖書でした。６歳で私はもうシェイクスピアの全場面を暗誦することができました」（A.a. o.,S.274.『モールと将軍（1）』栗原佑訳、大月書店、1976年刊、248頁）。モール（Mohr）は、ドイツ語でムーア人を意味する。英語で言えばMoorである。シェイクスピアの『ヴェニスのムーア人、オセロー（*Othello, the Moor of Venice*）』に由来する命名である。この点にもマルクス一家の沙翁趣味がうかがえる。

このように高まったマルクス家におけるシェイクスピア熱が長女ジェニー（Jenny Marx, 1844-83）をはじめ娘たちに及ぼした影響について、現代英国のマルクス研究家マクレラン（David McLellan, 1940-）が、次のように描写している。「1870年代の終りには、エリナは、彼女が両親から受け継いだ演劇への興味に基づいて身を立てようという努力をした。マルクス一家は常にシェイクスピアに強い興味を示してきたが、ヘンリー・アーヴィング（Henry Irving）が下したシェイクスピア悲劇についての新解釈に対する熱烈な賛同者となった。ジェニー・マルクスは、エリナの助けを借りて『フランクフルター・ツァイトゥング』に一連の論文を発表して、アーヴィングと彼の「独特の、信ずるに足る独創的なシェイクスピア像」とを擁護した。エリナはファーニヴァルの新シェイクスピア協会（Furnivall's New Shakespeare Society）の熱心な会員になり、アーネスト・ラドフォード（Ernest Radford）やドリ・メートランド（Dolly Maitland）といった俳優と友達であった。彼女はまた、或るシェイクスピア朗読倶楽部の会員でもあり、その会はしばしばマルクスの家でも催された」（David McLellan, *Karl Marx. His Life and Thought*, London, 1973. p.418. D・マクレラン『マルクス伝』杉原・重田・松岡・細見訳、1976年刊、422頁）。「エリナは、両親の病気と死によって一時中断させられたものの、自分の志望を貫き、そして結局、未来の夫エドワード・エーヴリング（Edward Aveling, 1851-1898）とともに、当時の演劇界に大きな貢献をしたのであった」（Ibid. p.419. 同書423頁）。

ヘンリー・アーヴィング（Henry Irving, 1838-1905）は、1856年から逝去の年1905年まで半世紀にわたって舞台に立った俳優で、人生後半の30年間はヴィクトリア社会の中心人物と目されていた。1895年に俳優としては最初にナイトの称号を与えられている。フレデリック・ファーニヴァル（Frederick

James Furnivall, 1825-1905）は、言語学者としてオックスフォード英語辞典の編集に参加するとともに、初期英語文献協会（the Early English Text Society, 1864）、チョウサー協会（the Chaucer Society, 1868）、バラッド協会（the Ballad Society, 1868）、新シェイクスピア協会（the New Shakespeare Society, 1873）、ブラウニング協会（the Browning Society, 1881）、ウィクリフ協会（the Wyclif Society, 1882）、シェリィ協会（the Shelley Society, 1885）を設立し、重要詩人・作家の関連文献の研究・編集・刊行に尽力した。シェイクスピアを媒介にしたこれらの人々とマルクス一家の関係は、改めて注目に値する事柄のように思われる。

英国のマルクス沙翁論

マルクスが愛読し暗唱したシェイクスピア作品から自己の著作に引用することも数多く見られる。当然のことながら、シェイクスピアとマルクスの関係について多くの人が注目し関心を寄せることになる。一方でそういう論考を渉猟し、他方でマルクスの未公刊書簡・小冊子・主要著作を熟読玩味して、「これはマルクス主義を巡る書物ではないし、新たなマルクス主義文学理論を構築する試みでもない〈This is not a book about Marxism nor an attempt to construct yet another Marxist theory of literature.〉」と断ったうえで、「マルクスがその生涯の各時点で文学について何を語ったか、彼が読んだ多くの小説や詩や戯曲を、楽しみのために、気晴らしのために、子供の教育のために、どのように使用したか、彼が非文学関連の作品に、文藝批評の術語や概念を、どのように導入したか〈what Marx said about literature at various time in his life; what use he made of the many novels, poems, and plays which he read for enjoyment, recreation, or instruction; and how he introduced, into works not overtly concerned with literature, the terminology and concepts of literary criticism.〉」（p. vii）を明らかにすることを目的に掲げたのが、Siegbert Salomon Prawer, *Karl Marx and World Literature*（Oxford University Press, 1976）である。

1925年にドイツのケルンでユダヤ人の両親の下に生まれたプロワーは、ナチス体制から逃れて1939年にイギリスに移住、以後イギリスで教育を受けて、上記著書刊行時は、オックスフォード大学のドイツ語ドイツ文学の教授を務めていた。好評を博した同書は、2011年に他の出版社から再刊されている。その後、著者は2012年４月５日にオックスフォードで死去を迎えた。

Karl Marx and World Literature は、マルクスの生涯に即して彼の読書歴を辿っているが、言及されることが最も多い著作者は、マルクスの同国人のゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）であり、踵を接する形で次に関説されることが多いのが、シェイクスピアと、同国人で同時代人のハイネ（Heinrich Heine, 1797-1856）である。前述したようにシェイクスピアへのマルクスの傾倒ぶりをうかがい知ることが出来る。

同書は、以下に示すように、マルクスの愛好の作品、愛読書の主人公、或いはマルクスが取り組んだ論題などを章名とした13章と結論部分を加えた14章から構成されている。

Chapter 1. Prometheus p.1-
Chapter 2. The Lantern of Diogenes p.32-

Chapter 3. Shylock, Timon, Mephistopheles p.56-
Chapter 4. Mysteries of Paris p.86-
Chapter 5. Praxis and Ideology p.103-
Chapter 6. From *Grobianus* to *Jean Ziska* p.125-
Chapter 7. World Literature and Class Conflict p.138-
Chapter 8. The Reigh of Pecksniff, Crevel, and Crapulinski p.166-
Chapter 9. Historical Tragedy p.197-
Chapter 10. Orators and Culture-heroes p.232-
Chapter 11. Models and Metaphors p.272-
Chapter 12. Capital p.307-
Chapter 13. Book-worming p.348-
Conclusion. p.399-

この14章のなかで、第12章が「資本（Capital）」と題されて、最多の頁数が割り当てられている。『剰余価値学説（*Theorien uber den Mehrwert*）』『資本論（*Das Kapital*）』を主な対象として、そこに引用されている文学作品との関連が検討されている。経済学研究の見地からは最大の関心が払われるべき部分である。

二一世紀に入って、シェイクスピアとマルクスの関係そのものを対象として、Gabriel Egan, *Shakespeare and Marx*（Oxford University Press, 2004）が刊行された。以下の６章から構成された著書である。

Introduction. p.1-
Chapter 1. Shakespeare, Marx, Production, and the World of Ideas p.7-
Chapter 2. Marx's Influence on Shakespeare Studies to 1968 p.46-
Chapter 3. Marx's Influence on Shakespeare Studies since 1968 p.69-
Chapter 4. Shakespeare and Marx Today p.98-
Conclusion. p.138-

Shakespeare and Marx は、「本書の目的は、マルクス主義がシェイクスピア研究者に及ぼした過去および現在の影響を説明し、マルクス主義が将来の政治的要素を含む文芸批評・演劇批評および文化分析においてどのような役割を果たすことが出来るかを示すことである〈This book aims to explain the past and present influence of Marxism for Shakespearians, and to suggest ways in which it can play a role in the future of politically engaged literary and dramatic criticism and cultural analysis.〉」（p.1）と述べている。

この意味で、*Shakespeare and Marx* は *Karl Marx and World Literature* とは対照的な性格の書物であることが分かる。後者が「新たなマルクス主義文学理論を構築する試みではない」と明言していたのに対して、前者は「新たなマルクス主義文学理論を構築する試み」を目的にしていると言える。そういう目的に向かって、第１章で、「社会の基礎（生産が行われる様式）と上部構造（生産様式に対応する法

体系、教育、芸術を含む精神構造）に関わるマルクス・モデル〈Marx's model of society's base（the way production is organized）and superstructure（the corresponding mental systems including jurisprudence, education, and art）〉」（p.1）を巡る種々の概念、「イデオロギー、弁証法、交換、疎外、商品の物神崇拝、そして物象化〈ideology, dialectic, exchange, alienation, commodity fetishism, and reification〉」（p.98）を検討して、「第２章、第３章で、生産やイデオロギーや文化に関わるマルクス主義的思考が、二〇世紀のシェイクスピア研究を築き上げてきた様子を詳細に究明したい〈Chapter 2 and 3 of this book will explore in detail how Marxist thinking about production, ideology, and culture shaped twentieth century Shakespeare studies.〉」（p.36）と、決意を表明している。

このような同書の性格のゆえに、〈『資本論』の沙翁引用〉を通じて、ということは、説明のためにマルクスが引用したシェイクスピアの表現を分析して、経済的事象の特質を解明する材料としては、同書に多くを期待することは困難であるように考えられる。

日本のマルクス沙翁論

日本に眼を転じてみると、マルクス『資本論』が引用したシェイクスピアの表現を問題として検討した書物としては、何を措いても、川上重人（1950-）『シェイクスピアは『資本論』のなかでどう描かれたか』（本の泉社、2001年刊）が挙げられる。

川上氏は、次のような見地から従来『資本論』を愛読してきた。「『資本論』は、人類が作り出したもっとも体系的な経済学の科学的著作である。そこには経済理論のみならず聖書やシェイクスピア、ゲーテ、ハイネ、ダンテ、バルザックなど多くの文学作品が登場する。とても難解ではあるがマルクスの豊かな教養にも触れることのできる稀有な書物でもあり、読む者に深い感動とエネルギーを与えてくれる」（７頁）。

1988年、川上氏は、４歳の次男を小児ガンで失った。「まったくもぬけの殻で、何もかにも意欲がなくなり、ただ生き続けるためにのみ食していた。これではいけない、何か目的を持たなければとシェイクスピアにしがみついた」。そして、シェイクスピアが「生きる勇気を与えてくれることを感じ取った」（８頁）。

こうして生まれた『シェイクスピアは『資本論』のなかでどう描かれたか』は、『資本論』に登場する八つのシェイクスピア作品に即して12件の引用を紹介する、次のような８章から構成されている。

第１章　ヘンリー四世第一部
　フォルスターフの存在感と「価値対象性」のつかまえにくさ　（引用２件）、13頁～。
第２章　から騒ぎ
　「恋」も「商品」も我を忘れ、たちまちにして踊り出す　（引用２件）、23頁～。
第３章　夏の夜の夢
　“まことの恋が平穏無事に進んだためしはない”　（引用１件）、35頁～。
第４章　アテネのタイモン

これだけの金があれば、醜を美に変えることができる　(引用１件)、45頁～。

第５章　お気に召すまま

この世はすべてこれ一つの舞台　(引用１件)、62頁～。

第６章　ハムレット

あらゆる問題は、矛盾を原動力として解決される　(引用１件)、71頁～。

第７章　ヴェニスの商人

シャイロックはシャイロックであって、シャイロックではない　(引用３件)、96頁～。

第８章　ジョン王

「秩序」は破られるためにある　(引用１件)、117頁～。

各章ごとに①『資本論』におけるシェイクスピア作品の引用個所が示され、②その引用部分を中心にして当該シェイクスピア作品の梗概が紹介され、③引用文との関係で該当する経済事象の意味合が解説される。『資本論』へのシェイクスピア作品の引用の全貌が一覧できる。著者は大変に親切な説明に終始しており、重宝間違いない書物と言える。

川上氏の著作が『資本論』におけるシェイクスピア作品の引用に専念したのとは対照的に、『資本論』中の全引用文献を対象として論じ、その一部分として、シェイクスピア作品からの引用に言及しているのが、江夏美千穂（1916－）『『資本論』中の引用文献にかんする研究』（第三出版、2003年刊）である。経済学研究書として構想された同書は、「序章・本書の生い立ち」（９頁～）に続いて「第１章・古典経済学と俗流経済学の対比」(29頁～)、「第２章・古典経済学批判」(34頁～)、「第３章・俗流経済学批判」(83頁～)、「第４章・その他の経済学文献にたいする批判」(134頁～)、「第５章・マルクス文献とエンゲルス文献」(200頁～)、「第６章・テクノロジー［技術学］文献」(234頁～)、「第７章・文芸作品と聖書とギリシャ神話」(262頁～)、「第８章・公文書刊行物と新聞、雑誌」(303頁～)、「第９章・補記の引用諸文献ならびに『新メガ』の文献引用にたいする批判と筆者の文献探索」(327頁～）の構成となっている。その内で第７章第１節が、「(1) W・シェイクスピアの作品」(262～266頁)、「(2) ゲーテの作品」(266～272頁）に分かれていて、前者においてシェイクスピアが取りあげられている。

江夏氏は、『K・マルクス、初版資本論』（幻燈社書店、1983年刊)、『K・マルクス、第二版資本論』（幻燈社書店、1985年刊）の訳者であり、『K・マルクス、フランス語版資本論、上下巻』（法政大学出版局、1979年刊）の共訳者（他の訳者は上杉聡彦氏）である。『資本論』において引用されたシェイクスピアの八つの作品（『ハムレット』、『ヘンリー四世』、『ヘンリー五世』、『ヴェニスの商人』、『真夏の夜の夢』、『から騒ぎ』、『リチャード三世』、『アテネのタイモン』）が指摘されたうえで、上記訳書によって以下のような９件の引用部分が紹介されている。〈　〉内が江夏氏の註解部分である。

① 『資本論』第１巻第１篇「商品と貨幣」第１章「商品」第３節「価値形態あるいは交換価値」において。「商品の価値がもっている客体性は、つかまえどころがないという点では、寡婦クイックリー〈『ヘンリー四世』での登場人物で、安酒場のおしゃべりおかみ〉と区別される」(263頁)。

② 同章第４節「商品の物神的性格とその秘密」において。「物の使用価値は人間にとっては、交換抜きで、したがって、物と人間との直接的な関係の場で、実現されるが、物の交換価値は逆に、交換の場でだけ、すなわち、ある社会的な過程の場でだけ、実現される、―ここでは、あのお人よしのドッグベリーが夜番のシーコールにこう教えているのが、思い出されないだろうか――『男ぷりがよいのは境遇の賜物だが、読み書きできるのは生まれつきだ〈『から騒ぎ』で登場する間抜けな警官ドッグベリーが言葉を取り違えて吐いた科白〉』、と」（263～264頁）。

③ 第３章「貨幣あるいは商品流通」第２節「流通手段」(a)「商品の変態」において。「商品は貨幣を恋するが、『まことの恋路はままならぬ。』〈真夏の夜の夢〉」（264頁）。

④ 同章第３節「貨幣」(a)「蓄蔵貨幣の形成」において。「諸商品のいっさいの質的な区別が貨幣では消え去っているように、貨幣は貨幣でまた、急進的な水平派としていっさいの区別を消し去ってしまう」、という本文文言に次のような註記（91）が添えられる。「金？黄色い、ぎらぎらする、貴重な黄金じゃないか？（中略―福留）―やい、うぬ、罰あたりの土くれめ、―淫売め。（シェイクスピア『アテネのタイモン』）」（264頁）。

⑤ 第３篇「絶対的剰余価値の生産」第８章「労働日」第５節「標準労働日のための闘争、14世紀中葉から17世紀末までの労働日延長のための強制法」のなかの註記（121）において。「労働者を非難する人々のなかで最も激怒しているのは、本文で言及した『産業および商業にかんする一論、租税の考察を含む。ロンドン、1770年』の匿名の著者である。これ以前すでに、彼の著書『租税にかんする考察、ロンドン、1765年』のなかでも、そうであった。なんとも言いようのないおしゃべりの統計家であるポローニアス・アーサー・ヤング〈ポローニアスは『ハムレット』で登場するおしゃべりな侍従長〉も、これと同じ道筋についていく」（265頁）。

⑥ 同章第６節「標準労働日のための闘争、労働時間の法律に基づく強制的制限、1833～64年のイギリスの工場立法」において。「『―工場主たちが機械を10時間以上運転させたいと熱望した結果、青少年や婦人が全員工場から退出したあとで、８歳ないし13歳の男女の児童を、成年男子とだけ一緒に晩の８時半まで働かせる、という慣習が、イングランドに忍び込んできた』。労働者と工場監督官は保健上と道徳上との理由から抗議した。だが、資本はこう答えた。『罪はこの身で引き受けるまで！手前の望みはお裁判（さばき）、証文通りの違背金をお願い申しておるんでございます』〈『ヴェニスの商人』での高利貸シャイロックの科白〉」（265頁）。

⑦ 同章同節において。「1844年の工場法を山猫のような目で読みとった資本は、８歳の働く児童を２時から晩の８時半まで絶え間なく酷使するばかりでなく空腹にしておく楽しみを、要求してむりやり獲得したのである！『さよう、その胸だ、ちゃんと証文にある』〈『ヴェニスの商人』でのシャイロックの科白〉」（265頁）。

⑧ 第４篇「相対的剰余価値の生産」第13章「機械と大工業」第９節「工場立法（保険条項および教育条項）、イギリスにおける工場立法の一般的適用」において。「大工業の本性は、労働の変換や機能の流動や労働者の全面的な可動性をひき起す。他方、大工業はそれの資本主義的形態では、旧式の分業をそれの骨化した分立性とともに再生産する。すでに述べたように、この絶

対的矛盾は、労働者の生活状態のいっさいの平穏や堅固さや安全を廃棄するのであって、彼の手から労働手段とともに生活手段を絶えずたたき落とし[307]」、という本文文言に「(307)『生命をつなぐ財産をお取りになるんじゃ、生命をお取りになるのも同じことよ』(シェイクスピア〈『ヴェニスの商人』でのシャイロックの科白〉)」(265～266頁)。

⑨ フランス語版『資本論』第８篇「本源的蓄積」第27章「農村民からの収奪」において。17世紀の最後の数年間には、「独立農民階級であり、シェイクスピアの『誇り高き農民』であるヨーマンリ〈『リチャード三世』ならびに『ヘンリー五世』〉」(266頁)は、数の上では借地農業者階級よりも多かった。

江夏氏は、『資本論』引用文献の探索に当って『新メガ』の重要性を強調している。「ソ連邦と東ドイツとのマルクス＝レーニン主義研究所は1974年に、『新メガ(新マルクス＝エンゲルス全集)』の刊行を開始した」(24頁)。「『新メガ』では『旧メガ』では欠落していたマルクス直筆の『資本論』が次々と覆刻・刊行された。すなわち、『初版』が“Ⅱ/5”の巻として1983年に、『第二版』が“Ⅱ/6”の巻として1987年に、『フランス語版』が“Ⅱ/7”の巻として1989年に」(25頁)。「『新メガ』の“Ⅱ/5”や“Ⅱ/6”や“Ⅱ/7”の偉業はたんにこれだけではない。もう一つの偉業として、上記の「覆刻〈本文〉分冊」とは独立に、“Apparat”(『書誌学』上の〈本文〉分冊研究資料)分冊がおさめられた。この“Apparat”中の「解説」では、『資本論』中の引用文献ならびに引用句が丹念に探索・検証されており、しかも驚くことに、各版『資本論』ではその典拠が全く示されていない分にまで探索・検証が及んでいる」(26頁)。この事情を勘案すれば、江夏氏の上記８作品９件の引用は、『新メガ』の“Apparat”中の「解説」に基づくものと考えられる。

江夏氏がシェイクスピアから８作品９件の引用を指摘するのに対して、川上氏は、前述の通り８作品12件の引用を行っている。川上氏の場合、シェイクスピア作品の引用句の探索方法について特別の記述は見当たらない。ただ、「『資本論』からの引用は、新日本出版社の上製版(全５冊)に依る。なお、引用箇所については新日本出版社の新書版(全13冊)もあわせて表記し」(川上、６頁)である、という状況から、社会科学研究所・監修、資本論翻訳委員会・訳『資本論』の訳者の註記や補足に手掛かりが求められたことが推測される。同訳書は50名を超える研究者が参加して推進された丹念な調査作業の成果であって、読者に裨益するところは計り知れないほどに大きいものがある。

改めて両者の取りあげたシェイクスピア作品を見ると、川上氏の場合、『ヘンリー四世第一部』、『から騒ぎ』、『夏の夜の夢』、『アテネのタイモン』、『お気に召すまま』、『ハムレット』、『ヴェニスの商人』、『ジョン王』の８作品。江夏氏の場合、『ヘンリー四世』、『から騒ぎ』、『真夏の夜の夢』、『アテネのタイモン』、『ハムレット』、『ヴェニスの商人』、『リチャード三世』、『ヘンリー五世』の８作品である。そのうちで相異なる作品は、川上氏に『お気に召すまま』と『ジョン王』があり、江夏氏に『リチャード三世』、『ヘンリー五世』が含まれていることである。判り易い事例から挙げると、江夏氏が『フランス語版資本論』に着目して、「農村民からの収奪」の章で「シェイクスピアの『誇り高き農民』であるヨーマンリ」を引き出し、その文句が『リチャード三世』と『ヘンリー五世』に含まれていると指

摘したことである。他方、川上氏は、『資本論』第１巻第２篇第４章「貨幣の資本への転化」第３節「労働力の購買と販売」において、「人間は、世界という舞台に現れた最初の日と同じように、今もなお毎日、彼が生産する以前にもその途中でも消費しなければならない」という一文について、「世界という舞台」に着目した。その一句が『お気に召すまま』の第２幕第７場に登場するのだと言う（川上、62～63頁）。いま一つは、『資本論』第３巻第５篇第26章「貨幣資本の蓄積、それが利子率に及ぼす影響」において使われた悪口雑言、「このずる賢いやつめ！この糞溜め（ダングヒル）貴族である百万長者」が、『ジョン王』第４幕第３場第87行に出ているとの指摘である（川上、117～118頁）。

快著と言うべきは、鈴木一策（1946-）『マルクスとハムレット―新しく『資本論』を読む』（藤原書店、2014年刊）である。その快著たる所以は、「はじめに」に刻まれた十余行に浮き彫りにされている。「カール・マルクスといえば、資本家による労働者の搾取を暴き、資本主義社会のメカニズムを明らかにした革命家ということになっている。確かにそういう面が濃厚にあることは、認めざるをえない。しかし、従来のマルクス像に囚われていては見えてこない、別の側面も確実に存在する。そして、その側面には、ウィリアム・シェイクアスピアの作品との出会い、ことに『ハムレット』との出会いの衝撃の余波が、感じられるのである。『ハムレット』には、ローマ的なヨーロッパ文明をはみ出す深い奥行きがある。だから、ローマ属領の拠点トリーア生まれのマルクスが、『ハムレット』をその深部から理解し得たかといえば、そうは言い切れない。『ハムレット』の深みに触れかかったと言いたいのだ。ただ、その深みに触れかけたとたん、マルクスはローマ的なものに引き戻されてしまう。ここでは、そのような揺れの振幅を呈するマルクスを、くっきりと描き出そうと思う。そうすることで、古代ローマに由来するヨーロッパの近代化の波に呑み込まれてきた左翼（もちろん私も含まれる）の立脚の足場を、根源的に反省してみたいのだ。」「私がマルクスの「悶え」に関心を抱いたのは、ジャック・ラカン（Jacques Lacan, 1901-81）の『ハムレット講義』と格闘し、戯曲『ハムレット』を熟読するようになったからである」（7～8頁）。

『資本論』に『ハムレット（*Hamlet, Prince of Denmark*）』関連の引用は確かに存在する。だが、それは微かな影の如きものに過ぎない。『資本論』第１巻第３篇第８章第５節「標準労働日獲得のための闘争、14世紀中葉から17世紀末までの労働日延長のための強制法」に関わって、註記（121）に「統計的おしゃべり屋であるポロウニアス・アーサー・ヤング」（川上、72頁）という形で『ハムレット』に登場するおしゃべりな侍従長の名前が、統計家アーサー・ヤング（Arthur Young, 1741-1820）を冷笑して冠らされたに過ぎない。

鈴木氏は、このような微かな繋がりしか認められないシェイクスピア作品『ハムレット』を引き出し、その主人公ハムレットを『マルクスとハムレット』という形で一書の中軸に据えている。

鈴木氏の快著は、『ハムレット』についての通常の解釈を覆すところから出発する。「通常の解釈によれば、ハムレットは死の「真相」を亡霊から告げられ、父を毒殺した劇を見て取り乱す叔父の姿を目撃し、毒殺の「傍証」まで得たことにより復讐者として確信を深め、叔父をつけ狙う存在と化す。ところが、叔父に襲いかかるチャンスはいくらでもあるのに、ハムレットは最後の最後まで復讐する

ことはなかった。そこで、ハムレットは、復讐を延期ばかりする愚図の代名詞となったのである」（鈴木、18頁）。だが、精密に『ハムレット』を読めば、「ハムレットは、父の死の『真相』など手にしておらず、父の正義を確信したいにしても、噂や世評から正義を疑ってしまうような、『あるのか、ないのか、分からず』悶える存在であることが、見えてくる」（20頁）。

旧約と新約の聖書が頻繁に参照される。ローマ的ヘーラクレース・対・ケルト的マーキュリーという神話の世界を飛び廻る離れ業も数多く繰り広げられる。アンリ四世（Henri IV, 1553-1610）やニコラス・バーボン（Nicholas Barbon, 1640-98）やドゥガルド・スチュアート（Dugald Stewart, 1753-1828）のような『資本論』の片隅に僅かに顔を覗かせる人物を追いかけてその意外な「真相」を明らかにする。「演劇において『無意識の取り違え』という意味で使われることの多い語」「シェイクスピアに由来するラテン語の『キドプロコ quid pro quo』」（12頁）を鍵の言葉とした三つの章（第７章・ハムレットのキドプロコ、第８章・価値表現のキドプロコ、第９章・生皮（ハイド）のキドプロコ）を設定、『資本論』に潜在するマーキュリー的側面の剔抉が試みられる。「カネ転がしのマネー資本主義が、世界を席巻している」（167頁）なかで、大地に繋がる自然資源を元手とする「完全無農薬農業のマーキュリー的実践」（177頁）、「里山資本主義のマーキュリー的実践」（181頁）、木材を活用する「オーストリアのエネルギー革命」（186頁）など「静かな逆流」が起こっている様子が活写される。このように奇想奇譚満載の快著であり、近年の新動向の貴重な報告書でもある。シェイクスピアを光源にして「新しく『資本論』を読む」手引きとして魅力十分の存在だと考えられる。

沙翁学者のマルクス論

著名なシェイクスピア研究者の側からのマルクスへの言及も存在する。小田島雄志（1930－）『シェイクスピアの人間学』（新日本出版社、2007年刊）Ⅲ.「ゲーテ、トルストイ、マルクスが読んだシェイクスピア」と題する章が、それである。この章は、「ゲーテ ── 舞台は彼の偉大な精神にとっては狭すぎた」（78～89頁）、「トルストイ ── あまりにも不自然すぎる」（89～95頁）、「マルクス ── シラーよりシェイクスピア」（96～108頁）の三つの節から構成されている。

このマルクスに関する節には、多少丁寧に読めば分明になることだが、マルクス自身の性急な断定と、それに依存したために生じた小田島氏の誤解が含まれている。如何なる分野であれ、学問研究に終着点は存在しないことを反省させるとともに、異分野交流の大切さを知らしめる事例と言えよう。

小田島氏は、川上重人『シェイクスピアは『資本論』のなかでどう描かれたか』を参考文献として挙げている。したがって、シェイクスピアの八つの作品から『資本論』への引用が行われていることは既知に属しているわけだが、小田島氏はそのなかから『資本論』第１巻第１篇第３章第３節「貨幣」a.「蓄蔵貨幣」における「アテネのタイモン」からの次の引用文を取りあげて、小田島氏自身の訳文で示している。ただ、マルクスの引用は部分的抜粋であるので、その部分については下線を施すことによって区別してある。（　）内は『資本論』に即した筆者の加筆部分を示す。

<u>金貨か（！）</u>？　<u>黄金色にきらきら輝く貴重な金貨だな（！）</u>？

いや、神々よ、私は真剣に祈っているのだ、
どうか草の根を！　だが、これだけの金があれば、
黒を白に、醜を美に、邪を正に、卑賤を高貴に、老いを若さに、
臆病を勇気に変えることもできよう。
神々よ、どういうことだ、これは？　どうしてこれを？
これはあなたがたのそばから神官や信者を引き離し、
まだ大丈夫という病人の頭から（枕）杖を引きはがすしろものだ。
この黄金色の奴隷めは、
信仰の問題においても人々を結合させたり離反させたりし、
呪われたものを祝福し、白癩病みを崇拝させ、
盗賊を立身させて、元老院議員なみの爵位や権威（や栄誉）を与えるやつなのだ。
枯れしぼんだ古後家を再婚させるのもこいつだ、
膿みただれたできものだらけの患者さえ一目見て
嘔吐をもよおすような女でも、こいつをふりかければ
たちまち四月の花と化けるのだ。やい、罰当たりな土くれ、
人間を誘惑し、国家のあいだに無謀な紛争を起こさせる
いかがわしい売女め、―（小田島、100～101頁）。

小田島氏は、「私は経済は専門外ですが、このタイモンの台詞から、貨幣の本質について論じるというところは、さすがにマルクスは経済学のプロだと思いました」（101頁）という感想を添えている。

小田島氏の説明で訂正を要する個所は、マルクスの「議会における戦争討論〈Die Kriegsdebatte im Parlament〉」と題する New York Daily Tribune（17. April 1854）掲載の時事評論に関わる。この評論の冒頭でマルクスはこう述べている。「ヴォルテールはシェイクスピアを酔っぱらった野蛮人だと言ったが、それほどにまでフランス人に反発的感情を起こさせるイギリスの悲劇の特性の一つは、崇高なものと低劣なもの、恐ろしいものと滑稽なもの、英雄的なものと道化たものが、独特なまじり方をしていることである」（Marx Engels Werke, Band 10. S.177. マルクス＝エンゲルス全集、第10巻、大月書店、1963年刊、181頁）（小田島、96頁）。

この記述を材料にして、小田島氏は、ヴォルテール（Voltaire, 1694-1778）とマルクスを次のように評価している。「ヴォルテールは、フランスの文学者・思想家で百科全書派の一人ですが、彼もシェイクスピアが嫌いだったようです。彼の批判に対して、マルクスが言っているのは、〈ごった煮性の肯定と節度〉ということだと思います」（98頁）。「見ている者が不愉快だとまではいかない。崇高なものと低劣なものがぶつかっていても、節度は心得ている、とマルクスは見ています」（99頁）。

マルクスへの評価について、小田島氏は、いま一つ別の材料を提示している。ドイツの社会主義者ラサール（Ferdinand Lassalle, 1825-1864）が作成した戯曲について批評を求めたのに対して、マルクスはこう書き送った。「君はそこで、自らもっとシェイクスピア風に書くべきだったのだ。ところが君

のは、諸個人を時代精神のたんなるメガホンにしてしまうシラー式だから、僕はそれを君の作品の最も重要な欠点と見なすのだ」(1859年4月19日)。(小田島、107頁)。

〈ごった煮性の肯定と節度〉という先述の論点と併せて、小田島氏はこう総括する。「シラーの場合、例えば『群盗』のような傑作でも、正義漢であればどこまでも正義漢、悪漢であればあくまでも悪漢として一貫しています。シェイクスピアの場合はそうはいきません。」「シェイクスピアは生身の人間というものを、つまり理想主義から見れば人間は真善美を目指すものだが、それだけじゃなくて人間には偽悪醜、時には嘘もつくし、悪いこともする、そういう面もある現実的な存在として描きました」(106頁)。シェイクスピアは、真善美と偽悪醜、崇高と低劣、そういう両面を併せ持つものとして人間を描き、マルクスは、その点を的確に理解していたということになる。シェイクスピアとマルクスに対する小田島評価は説得力が有ると考えられる。

他方、いま一つのヴォルテールに対する小田島評価には疑問が残る。マルクスの「議会における戦争討論」の先の引用部分については、「マルクス＝エンゲルス全集、第10巻」の編者によって、問題のヴォルテール論文の該当部分が(註108)として次のように紹介されている。〈「古代および近代の悲劇の研究」と題する悲劇『セミラミス』への序文(1748年)のなかで、ヴォルテールは、シェイクスピアの悲劇『ハムレット』についてこう書いている。「この劇作は酔っぱらった野蛮人の幻想の所産だと考えることもできるであろう。しかし、イギリスの演劇を今日もなおばかばかしい野蛮なものと思わせるこうしたでたらめさのあいだに、ハムレットのなかには、さらに一層大きな怪奇さとならんで、最大の天才にふさわしい高い思想が見出される。」〉(Marx Engels Werke, Band 10. S.699. マルクス＝エンゲルス全集、第10巻、大月書店、1963年刊、678頁)。

ヴォルテールは、「野蛮人の幻想の所産だと考えることもできるであろう。しかし」と続けている。そして、「最大の天才にふさわしい高い思想が見出される」と高く評価している。「シェイクスピアを酔っぱらった野蛮人だと言った」とするマルクスの判断は片面的に過ぎるのではないだろうか。(この百年以上以前のヴォルテール論文をマルクスが読み、かつ記憶していることについては、驚異の念を禁じ得ないけれども、このヴォルテール評価は均衡を失していると考えられる)。

マルクスの評価に基づいて、小田島氏が「ヴォルテールはシェイクスピアが嫌いだったようです」と判断したのであれば、これもまた不十分な理解ないしは誤解と言わねばならないだろう。

クィド・プロ・クオゥ

以上において、筆者は、専ら他人の文章の紹介に終始していて、筆者自身の独自の問題の検討を行ってこなかった。個々の引用に関する興味深い検討は別の機会を得ることとして、とりあえずは多少の独自の作業と指摘を試みて、小稿を閉じることにしたい。

鈴木一策氏によれば、「シェイクスピアに由来するラテン語の『キドプロコ quid pro quo』」は「演劇において『無意識の取り違え』という意味で使われることの多い語」(鈴木、前掲書12頁)である。『資本論』においては、Quidproquo という一語として、次のような具合に用いられている。

「商品の現物形態が価値形態になるのである。だが、よく注意せよ。この取り替えが一商品 B（上着や小麦や鉄など）にとって起きるのは、ただ任意の他の一商品 A（リンネルなど）が商品 B に対してとる価値関係のなかだけでのことであり、ただこの関係のなかだけでのことである。〈Die Naturalform der Ware wird zur Wertform. Aber, notabene, dies Quidproquo ereignet sich für eine Ware B（Rock oder Weizen oder Eisen usw.）nur innerhalb des Wertverhältnisse, worin eine beliebige andre Ware A（Leinwand etc.）zu ihr tritt, nur innerhalb dieser Beziehung.〉」（*Das Kapital*, Erster Band, Marx Engels Werke, Band 23. S.71）（岡崎次郎訳、国民文庫、第１分冊、108頁）。

「このような置き替えによって、労働生産物は商品になり、感覚的であると同時に超感覚的である物、または社会的な物になるのである。〈Durch dies Quidproquo werden die Arbeitsprodukte Waren, sinnlich übersinnliche oder gesellschaftliche Dinge〉」（*Das Kapital*, Erster Band, Marx Engels Werke, Band 23. S.86）（岡崎次郎訳、国民文庫、第１分冊、135頁）。

岡崎次郎訳書では、「取り替え」「置き替え」と訳されているが、向坂逸郎訳書では両方とも「とりちがえ」と訳されており（岩波文庫、第１分冊、104-5頁、131頁）、資本論翻訳委員会訳書では両方ともに「入れ替わり」となっている（資本論翻訳委員会訳、第１分冊、97頁、123頁）。

Quidproquo を英語読みして片仮名で「クィド・プロ・クオゥ」と表記して、この節の名称とする。意味は後に自ずと明らかになるはずである。

プロワー『マルクスと世界文学』（Siegbert Salomon Prawer, *Karl Marx and World Literature*）は、「『資本論』第１巻で、メロドラマ、道化芝居、政治劇、その他の演劇に基づく馴染みの隠喩が、新しい文脈で、しばしば新しい意味を帯びて、繰り返されている〈The familiar metaphors from melodrama, farce, *Haupt- und Staatsaktion*, and other dramatic entertainments recur in *Capital* I, in a new context and frequently with new implication.〉」（p.341）として、第３章「貨幣または商品流通」に材料を得て、例示を試みている。

「『商品の流通』に関する章で、人間によって作成されながら人間から疎外された財貨と貨幣が、それ自身のドラマを演じている。そのドラマは、『ロメオとジュリエット』からの引用によって、シェイクスピア的風趣を帯びることになっている。〈In the chapter on Circulation of Commodities, goods and money, alienated from the men who made them, play out a drama of their own which is even, by means of a quotation from Romeo and Juliet, given a Shakespearian flavor:〉」（p.341）

そういう前置を述べて、プロワーが示すドラマの台本は、以下のようになっている。その末尾に文章の出所についての註記84が付されているので、それを含めて８行を示す。

〈We see, then, that commodities are in love with money, but ‘the
course of true love never did run smooth’ . . . The complete meta-
morphosis of a commodity, in its simplest form, implies four ex-
tremes and four dramatis personae. First a commodity comes face

to face with money . . . In the first phase, sale, the commodity plays two parts . . . In the first instance, each new capital steps on to the stage (that is: the market) . . .[84]〉

[84] K 1—MEW XXIII, 520, 770, 799; 122-6, 161. (p.341)

このプロワーの８行の英文を翻訳すれば、ほぼ次のようになるだろう。

「皆が知っているように、商品は貨幣を恋い慕う、
だが、まことの恋が滑らかに進んだためしはない。」
「完全な商品の変態は、その最も単純な形態では、四つの極と
四人のドラマの登場人物を想定する。最初に、商品が
貨幣に対面する。」「第一の変態、販売において、商品は、
二役を演ずる。」「まず一番に、どの新たな資本も、
舞台に、つまりは、市場に、登場する。」
註記84—『資本論』第１巻、マルクス＝エンゲルス全集
第23巻、520頁、770頁、799頁；122～６頁、161頁。
(「四人のドラマの登場人物」は、『資本論』原文では「三人のドラマの登場人物」である—筆者註記)。

まず、二つの Quidproquo（取り替え・入れ替わり）を指摘する。第一、プロワーの取り違え。プロワーほどの比較文学の専門家が何故かくも単純な「取り替え」をしたのか、不思議としか言えないが、‘the course of true love never did run smooth’ は、『ロメオとジュリエット（*Romeo and Juliet*）』からの引用ではなくて、『真夏の夜の夢（*A Midsummer Night's Dream*）』第１幕第１場からの引用である。そのことは、Marx Engels Werke いわゆるマルクス・エンゲルス全集版『資本論』では編集者註記に明記されている。だから「取り替え」が何故生じたのか、不思議の思いが尽きないのである。「まことの恋が滑らかに進んだためしはない」という成り行きは、確かに『ロメオとジュリエット』の内容に似つかわしいかも知れない。しかし、この句は『ロメオとジュリエット』には存在しないのである。上記８行の英文の４行目、『資本論』原文ではドラマの登場人物が「三人」であるのに、プロワーは「四人」と「取り替え」ている。執筆を急いで確認を怠ったために生じた誤記であろう。

第二、マルクスたちの取り違え。‘the course of true love never did run smooth’. プロワーが書き込んだこの一句は、確かにシェイクスピアの書き残した文章に間違いない。ライサンダーとハーミアは相思相愛の間柄ながら、ハーミアの父がライサンダーとの結婚を許さない。そのことを嘆いて、ライサンダーが言う。「ああ、たまらない—今まで書物を読んでも物語や歴史を聞いても、まことの恋が滑らかに進んだためしはない（Ay me! for aught that I could ever read, Could ever hear by tale or history, The course of true love never did run smooth;）」。

しかしながら、『資本論』に書き込まれた文章は、シェイクスピアの原文と少し異なっている。「取り替え」が生じているのである、しかも二重に。現行の全集版『資本論』では、the course of true love

never does run smooth. と現在形で書かれている。シェイクスピア原文が過去形で never did run smooth. となっているのと異なる。しかもこの形は、1890年刊行のエンゲルス編集の第四版以降のことである。それ以前の1867年初版、1872年再版、1883年三版までは、the course of true love runs never smooth. と異なる現在形であった。おそらくは、マルクスが記憶に従って、シェイクスピア原文と異なる文章を初版原稿に書き込んだのであろう。

この Quidproquo（取り替え・入れ替わり）現象は、現代日本の社会の裡でも種々の形で生じている。あるいは、生じさせられている。一例を挙げる。日本国憲法第９条②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

憲法で保持しないと規定する「陸海空軍その他の戦力」に取り替えるために、戦後の歴代日本政府は、様々の手立てを講じてきた。1950年に朝鮮戦争が始まって、在日米軍の主力が国連軍として朝鮮半島に展開すると、国内の治安維持に不安が生じたとして、政府は同年８月に警察予備隊を創設した。1951年に対日講和条約が調印されて、翌52年４月28日、日本は主権を回復した。主権回復後の同年８月には、警察予備隊は保安隊に拡充された。1954年６月に防衛庁設置法案と自衛隊法案が国会を通過して、1954年７月１日に自衛隊が創設された。従来は一般警察力を補うことを目的としていた警察組織が、「わが国を防衛することを主たる任務」とする防衛組織へ入れ替わったのである。その時点から63年を経た2017年５月３日の憲法記念日に、最高政治権力者が憲法改正を求める集会に向けて「９条１項、２項を残しつつ、自衛隊を明文で書き込む」という極めて興味深い Quidproquo（取り替え・入れ替わり）を提案した。

次に、註記84に即して、プロワーの指示した頁数の個所において、いかなる形でマルクスが演劇用語を使用しているかを点検する。下線を付したのが演劇関連表現である。

S.520. Die ganze Farce ist zu charakteristisch für den Geist des Kapitals, um hier nicht einige Auszüge zu geben.

（この全くの茶番は、余りにもよく資本の精神を特徴づけているので、ここで幾つかの抜き書きを出さないわけにはいかないのである）。

S.770. Nachdem wir die gewaltsame Schöpfung vogelfreier Proletarier betrachtet, die blutige Disziplin, welche sie in Lohnarbeiter verwandelt, die schmutzige Haupt- und Staatsaktion, die mit dem Exploitationsgrad der Arbeit die Akkumulation des Kapitals polizeilich steigert, fragt sich, wo kommen die Kapitalisten ursprünglich her?

（われわれは、無保護なプロレタリアの暴力的創出、彼らを賃銀労働者に転化させる流血的訓練、労働の搾取度と共に資本の蓄積を警察力によって増進する君主や国家の卑劣な行為＝大立ち回りの政治劇、これらのことを考察して来たのであるが、次に問題になるのは、そもそも資本家はどこから出てきたのか？ということである）。

S.799. „Unser Kapital“, seufzt eine der Personen des Melodramas, „unser Kapital lag bereit fur viele Operationen, die eine beträchtliche Zeitperiode zu ihrer Vollendung brauchen;“

（このメロドラマの登場人物の一人は、次のように嘆いている。「我々の資本は、完成までにかなり

の期間が必要な多くの 作業のために用意されてあった。―」)

以下は、上記プロワーの台本の7行の英文に対応する部分である。

S.122. Man sieht, die Ware liebt das Geld, aber „the course of true love never does run smooth".

(誰でも知っていることだが、このように商品は貨幣を恋い慕う。だが、まことの恋が滑らかに進んだためしはない。)

〈We see, then, that commodities are in love with money, but "the course of true love never did run smooth"〉

S.125. Die Gesamtmetamorphose einer Ware unterstellt, in ihrer einfachsten Form, vier Extreme und drei personae dramatis. Erst tritt der Ware das Geld als ihre Wert-Gestalt gegenüber,—

(商品の総変態は、その最も単純な形態では、四つの極と三人のドラマの登場人物を想定する。最初に、商品がその価値姿態としての貨幣に対面する。)

〈The complete metamorphosis of a commodity, in its simplest form, implies four extremes and four dramatis personae. First a commodity comes face to face with money〉

S.126. Während ihrer ersten Wandlung, dem Verkauf, spielt sie diese zwei Rollen in eigner Person.

(第一の変態、販売において、その商品は一身で二つの役を演ずる。)

〈In the first phase, sale, the commodity plays two parts〉

S.161. Jedes neue Kapital betritt in erster Instanz die Bühne, d.h. den Markt,

(どの新たな資本も、最初に舞台に、つまり市場に、登場する。)

〈In the first instance, each new capital steps on to the stage (that is: the market)〉

『資本論』のなかで、マルクスは、シェイクスピア作品の科白を活用し、「メロドラマ、道化芝居、政治劇、その他の演劇に基づく馴染みの隠喩」を使用し、商品・貨幣・資本を擬人化するなど、経済現象の説明に演劇用語を駆使していることは明らかである。プロワーが、『資本論』原書125頁から引用した「商品の変態」論は、その数行先まで辿ると、以下のようにマルクスの演劇的筆法がより明確になるとともに、「三人」を「四人」と取り違える彼の誤りも避け得られたはずである。「Sobald die Ware nun in Geld verwandelt, wird letztres zu ihrer verschwindenden Äquivalentform, deren Gebrauchswert oder Inhalt diesseits in andren Warenkörpern existiert. Als Endpunkt der ersten Warenwandlung ist das Geld zugleich Ausgangspunkt der zweiten. So wird der Verkäufer des ersten Akts Käufer im zweiten, wo ihm ein dritter Warenbesitzer als Verkäufer gegenübertritt.」

(商品が貨幣に転化されれば、その貨幣は商品の一時的な等価形態となり、この等価形態の使用価値または内容はこちら側で他の商品体のうちに存在する。第一の商品変態の終点として、貨幣は同時に第二の変態の出発点である。こうして、第一幕の売り手は第二幕では買い手になり、この幕では彼に第三の商品所持者が売り手として相対するのである。)

〔九州大学名誉教授〕